

グラウンディング概念の理解における実体の役割について

On the role of substance in understanding the concept of grounding

後藤真理子

### Abstract

This paper aims to counter the doubt of grounding discussed by Daly. Grounding is a noteworthy concept in recent metaphysics. However, there are doubts about grounding. Among them, I will focus on an objection to grounding by Daly and discuss it. First, I briefly outline the objection by Daly that grounding is unintelligible. Second, I accept Audi's idea that if we take into account substance, it may be possible to answer Daly's objections. Finally, I suggest that we may be able to answer the objection that grounding is unintelligible by incorporating the characterization of substance given by Lowe into Audi's idea.

#### (1) 研究テーマ

本稿は、グラウンディング概念に対するデイリーの批判に再反論する事を目的としている。具体的には、デイリーのグラウンディング概念は理解不可能であるとする批判に対し、実体概念を考えるならばデイリーの批判に返答可能であるかもしれないというアウディーのアイデアを出発点として、ロウの実体概念を取り入れる事でデイリーの批判を退ける可能性を示す。

#### (2) 研究の背景・先行研究

近年分析形而上学内部において、「アリストテレス的現代形而上学」と呼ばれる伝統的形而上学を復興させようとする動きが見られる。このアリストテレス的現代形而上学は、分析哲学における二つのメルクマールである言語主義と物理主義へのある種の反抗として受け取る事が可能である。特に後者への反抗は、「第一哲学としての形而上学」というアリストテレス的現代形而上学の特徴付けの一つと結び付けられる。クワイン的な物理主義は、一般に、物理学を「諸事象を包括的に扱うことができ、かつ極力単純であるような体系を構築しようとする学問」だと措定し、その上で物理学に「事実判断の最終的審判者」という特権的身分を与える<sup>1</sup>。このクワイン的な「自然化された」形而上学観とでも呼ばれるところのものでは、形而上学はその方法と目的に関して科学と連続的であるとされ、存在についての問いは「規格化された理論」であるところの物理学を適用することで答えられるべきであると考えら

れる。これに対してアリストテレス的現代形而上学では、形而上学を「第一哲学」として、言い換えるならば「世界に関するありとあらゆる哲学的・合理的な探求の中核をなし、開始点となる」学問として捉える。つまり、アリストテレス的分析形而上学者は、形而上学と諸科学との関連性を認めはするものの、形而上学を諸科学で用いられる科学的知識の前提となる「第一哲学」として位置づけようとするのである。

このクワイン的な方法と対立すると考えられるアリストテレス的形而上学者にとっての存在論の課題と方法をシャッフアーは以下のように簡潔に纏める<sup>2</sup>。アリストテレス主義的な存在論の課題とは、何が何に基礎付けられているのかについて述べることであり、そしてアリストテレス主義的な存在論の方法論とは、グラウンディングのついでに何が基礎的であるかについての診断を展開することなのである、と。ここで重要となるのがグラウンディングである。グラウンディングは「形而上学的説明」として理解され得るものであり、概して事物の間の優先性を表現すると考えられている。グラウンディングという概念が目的としているところのものは、クワイン的な「何が存在するのか」という問いかけに基づく存在者のリストの作成ではなく、存在者間の優先性あるいは存在者間の依存関係に関する構造の解明であり、また「何がより基礎的な存在者であるのか」というアリストテレス的な問いかけへの解答なのである。

しかしながら、このグラウンディングという概念への批判は複数あげられているのだが、その中でも、デイリーはグラウンディングという概念それ自体に懐疑を寄せている。デイリーは、グラウンディング論者の行う主張を以下の三点にまとめている。すなわち、(1)「グラウンディング」という用語は理解可能である、(2) その用語は原始的である、(3) その用語は有用である、という三点である<sup>3</sup>。(1) について、デイリーはより理解しやすい言葉でグラウンディングを定義することによってそれを理解しようとするという戦略をあげている。例えば、「[Fa]は[Gb]によって基礎付けられる」という命題を、「[Fa]は[Gb]によって必要とされる」、または「[Fa]は[Gb]の持つ本質的性質の構成要素である」、または「[Gb]は[Fa]にスーパーヴィーンする」というように定義するならば、グラウンディングという概念は理解可能である。しかしながら、この戦略は主張(2)に抵触する。ある概念が原始的であるとは、すなわちその概念が他の概念によって定義不可能であるという事を示す。故に、主張(1)において採られた他の用語によってグラウンディングを定義するという戦略は採る事が出来ない。では、どのようにすればグラウンディングという概念を説明することが出来るのか。このような疑問を出発

点とし、デイリーはグラウンディングに関する批判を開始している。

デイリーによれば、グラウンディングの支持者は、(a) その論理的性質、(b) 他の用語との関連の提示、(c) 実例の提示という三点を示す事によってグラウンディングという概念の説明を試みる。しかし、以上の三点の説明は達成できていないとデイリーは主張している。本稿では (a) と (b) に焦点を当て、デイリーの論点を明確化したい。

まず、(a) について、デイリーは「説明する」という述語とグラウンディングとの比較を例として挙げ、グラウンディングの持つ論理的性質が、その内容を確定しないと述べる。「[Fx]は[Gy]を説明する」という形式の文章に含まれる「説明する」という用語の使用を考える時、「説明する」という語は先に示した (1) から (3) の形式的特徴を持つとデイリーは述べる。しかし、「説明する」と「グラウンディング」は、想定される外延とは異なっている。例えば、因果関係を考える時、原因はその結果を基礎付けていないが、原因は結果を説明していると述べる事が可能である。もし[Fa]が[Gb]を基礎付けるならば、その時[Gb]という命題は[Fa]という命題を伴うのだが、ある原因がある結果を引き起こす場合、「ある原因が起こる」という文は、「ある結果が起こる」という文を伴わない。これらの見解を採るならば、原因はその結果を基礎付けないという事になるが、原因は結果を説明しているので、「説明する」と「グラウンディング」という語の外延は異なるという事になる。以上のように、デイリーは「説明する」という語との比較を通して、グラウンディングの論理的性質がどのようなものであるのかをよりクリアにし、その結果グラウンディングの持つ論理的性質はその内容を確定しないという結論を下す。

またデイリーは (b) 他の用語との関連の提示についても批判を行う。グラウンディングという用語を理解する一つの方法は、既に理解されている用語を用いてその分析的関係を辿ることであるとしたうえで、デイリーはグラウンディングと他の用語との関連を例示する。ここでグラウンディングに関連する語である「より高い実在性の程度 (a greater degree of reality)」の定義が挙げられている。より高い実在性の程度という語は、以下のように定義される。

$x$  は  $y$  よりも高い実在性の程度を持つ  $\text{def}$   $x$  は  $y$  を基礎付ける

この定義によれば、事実[Fa]が事実[Gb]よりも高い実在性の程度を有するかどうかを知る唯一の方法とは、[Fa]が[Gb]を基礎付けるかどうかを確立する

事であるとされているように思われる。しかし、この定義には問題があるとデイリーは主張する。この定義は「より高い実在性の程度を持つ」という述語をグラウンディングによって定義している。それ故、まずグラウンディングを理解することによって、我々に「より高い実在性の程度を持つ」という語への理解が与えられる事になってしまう。このように、グラウンディングとそれに関連する語との関係性を提示することでグラウンディング概念の説明を行おうという実際の試みは失敗しているとデイリーは示している。グラウンディングとそれに関連する語との関係性を提示したとしても、それを理解するためにはグラウンディングへの理解が必要不可欠なのである。

以上の点を挙げ、デイリーは論文中でグラウンディング概念そのものを我々は理解できないのではないかという批判を行っている。本稿ではデイリーの批判に対して、アウディーのアイデアを援用しつつ、ロウの『形而上学の可能性』にて提示されている実体概念に基づいて再反論を試みる。

### (3) 筆者の主張

前節でみたデイリーの批判について、アウディーは実体概念を取り入れる事によって解決が可能であるかもしれないという事を示唆している<sup>4</sup>。アウディーは、デイリーの (b) 他の用語との関連の提示を有望なアプローチであると述べ、実在性の程度という観点からの説明は注目に値するとする。アウディーによれば、実在性の程度というアプローチは、実体と関連させる事でデイリーの疑問に解答しうるアプローチであるとされる。つまり、実体についての先だった理解によって、我々は先に見た実在性の程度の定義に出てくるグラウンディング概念を理解する事が可能となる。例えばすべてのものが最終的に実体に依存しているというアリストテレスの思想とグラウンディングが結びついていると考える時、グラウンディングはこのヒエラルキー構造における依存関係を示す概念であるという説明が可能となりうるとアウディーは述べるのである。

このアウディーのアイデアに則るならば、実体を導入する事でグラウンディング概念の説明が可能になる。しかし、ここで一つの疑問が生じる。ではその実体とはどのような概念であるのか。実体概念が具体的にどのような内実を持つのかという事を明らかにしなければ、このアウディーのアイデアを額面通りに受け入れる事は難しい。何故ならば、実体についての先立った理解がなければ、実在性の程度の定義に現れたグラウンディング概念を理解する事が出来ないからである。さて、アリストテレスにとって実体概念とは何であるのかという事について、「本質」「形相」「現実態」といった複数の解答が考えられうる<sup>5</sup>。すなわち、アリストテレスの哲学においても実体の定義は

一義的にはなされておらず、様々な解釈が可能なのである。

現代において、実体を基礎的な存在者とするアリストテレス的現代形而上学者のうち一人がロウであろう。ロウは実体は何らかの意味での「独立性」を持っているという点で、他のカテゴリーに対する特権的な位置にあるという事を認め、それ故に実体を基礎的存在者であると見なす<sup>6</sup>。では彼は実体をどのように定義するのか。以下では、『形而上学の可能性』および加地(2008)を参照する事で、その概略を確認する。

ロウはまず、実体を暫定的に以下のように定義する。「 $x$  が実体であるのは、 $x$  が個体であり、かつ、 $x$  と同定されず  $x$  がその存在を  $y$  に依存しているような個体  $y$  が存在しない時かつその時に限る。」この実体の定義において問題となるのは存在論的依存とはどのようなものであるのかという事である。その点について、ロウは存在論的依存を「 $x$  はその存在を  $y$  に依存している =df 必然的に、 $x$  の同一性は  $y$  の同一性に依存している」と定義している。以上の実体の暫定的定義に存在論的依存の定義を加えたものが、実体のより正確な定義となる。すなわち、「 $x$  が実体であるのは、 $x$  が個体であり、かつ、 $x$  と同定されず  $x$  がその同一性を  $y$  の同一性に依存しているような個体  $y$  が存在しない時かつその時に限る。」さて、この定義に関してもまた、より子細に分析されなくてはならない点がある。それは同一性への依存である。 $X$  の同一性が  $y$  の同一性に依存するとは果たしてどういう事であるのか。ロウはこの点を明確にするために、「もし  $x$  の同一性が  $y$  の同一性に依存しているならば、必然的に、以下のような関数  $F$  がある。つまり、 $x$  は必然的に  $y$  の  $F$  と同定される。」という関数を導入する。これはどういうことか。ロウは結婚という例を挙げて、この事を説明している。結婚の同一性は結婚している二人の人間に依存する。それ故、もし  $x$  が結婚であり、 $y$  と  $z$  が問題における二人の人間であれば、上記の関数の定義は、 $x$  が  $y$  と  $z$  との結婚と必然的に同一であるという事実のおかげで満たされる。この場合、必要な関数は「 $z$  との結婚」という事になる。しかし、注意しなくてはならないのは、これは同一性の依存についての必要条件であっても十分条件ではないという事である。この点について加地は以下のように簡潔に纏めている。「例えば、 $x$  の同一性は  $x$  を唯一の要素とする集合(シングルトン)  $\{x\}$  の同一性に依存しないにもかかわらず、「必然的に、 $x$  は、シングルトン  $\{x\}$  の唯一の要素と同一である」という命題が成立してしまうからである<sup>7</sup>。」このような場合を考える時、少なくともこの関数の導入による同一性の依存の定義は不十分である。故にロウは同一性の依存について、本質を導入する事で解決しようと試みる。

ロウは、有望な戦略として、 $\{x\}$  の唯一の要素であるという事が  $x$  の「本質」

の一部ではないという理由で、除外する事を提案する。この考えに従えば、 $y$  の  $F$  である  $x$  の本質の一部ではないような関数  $F$  を除外することができる。ロウは述べ、以下の新たな定義を示す<sup>8</sup>。

$x$  の同一性は  $y$  の同一性に依存している =*af* 必然的に、 $x$  が  $y$  の  $F$  であるという事が、 $x$  の本質の部分であるような関数  $F$  がある。

さて、この定義における関数  $F$  は、 $x$  の属する種の同一性基準によって供給されるものだと考えられると加地は述べる<sup>9</sup>。同一性条件とは、ある対象  $a$  がある対象  $b$  と同一であるということを決める条件であるのだが、ロウは、一般的な同一性条件が「 $x$  と  $y$  が条件  $C_\phi$  を満たす時そしてその時に限り、もし  $x$  と  $y$  が同じ種  $\phi$  であるならば、 $x$  は  $y$  と同定される」と述べる<sup>10</sup>。ここで言及されている条件  $C_\phi$  は、種  $\phi$  によって異なるものとなる。例えば、もし個別者  $a$  が彫像であり、個別者  $b$  がブロンズ原子のメレオロジカルな和であるとするならば、その時個別者  $a$  は個別者  $b$  と同定されることができない。何故ならば、彫像という種とブロンズ原子の和という種は異なる種であるために、それぞれの同一性条件もまた異なるからである。このような同一性基準によって関数  $F$  は与えられる。加地によれば、例えば集合の場合は、外延性の公理 (Axiom of Extensionality) がその同一性基準を規定している。故に、 $a, b, c$  という三つの要素からなる集合  $S$  は、「 $a, b, c$  (のみ) を要素とするもの」であるということがその本質の一部であることになる。この事から、集合  $S$  は要素  $a, b, c$  にその同一性を依存しているので実体とは言えないという事になる。対してもし  $a, b, c$  それぞれが例えば生物的個体や人物であるとすれば、それらは実体であることになるのである。ロウは個体が属する種の本質がその個体の同一性基準を与えるとした上で、その本質を他の個体に依存しないことをもって実体の条件としている、と加地は結論付ける。

以上の点を考慮する時、アウディーの示唆は以下のように解釈される事が可能であろう。実在性の程度というアプローチについて、実在性の最も高い実体概念と関連させる事でデイリーの疑問に解答しうるアプローチであるとアウディーは述べる。この時、実在性の最も高い程度を持つ実体はアリストテレスの述べるところの「それだけで存在しうる」ものでなければならないだろう。この事について、ロウの解釈するところの実体概念は、本質によって他の個体に依存しないという実体の条件を与えている点でアドバンテージがあるように思われる。ロウの考えに則るならば、実体はそれの持つ本質に関して他の個体に依存せずに存在するものである。故に、「それだけで存在し

うる」ものであり、ヒエラルキーの最も下に存在することのできるようなものとして実体を捉えている。アウディーはヒエラルキーの最下層に措定できるようなアリストテレス的な実体を考える時のみ、グラウンディングをそのヒエラルキーにおける形式的な依存関係を示すものとして説明可能であるとしている。ロウの実体についての理解をアウディーの提案に組み込むとき、グラウンディングについての理解は可能となる。すなわち、実体を基礎としたヒエラルキーを考えるならば、グラウンディングとはヒエラルキー構造内の依存関係であるという説明が可能となり、グラウンディングをグラウンディングによって定義する事になってしまうというデイリーの批判点は解決され得るのである。故に、実体を取り入れる事により、デイリーのグラウンディングは理解不可能であるという批判に応答可能となる。

しかしながら、本質に関して他の個別者に依存していない存在者こそが実体であるというロウの考えについて批判を行う事は可能である。実体と本質とが深く関係している点に関して、そのような批判は、よりアリストテレス的なものであろう。この点において、アリストテレス的な探究を行う事を目的とするグラウンディングとロウの実体概念とは噛み合いやすいものであるように思われる。だが、アリストテレスが実体について「それだけで存在しうる」と述べているのに対して、本質によって実体が個別化されるというロウの実体についての考え方は、実体の本質にある種依存している点と捉える事が可能である。このように捉えた時、実体は「それだけで存在しうるもの」とは言えないのではないだろうか。この事に関しては、アリストテレス自身が『形而上学』Z巻において「実体とは何か」という問いの答えとして「本質である」という解答をしているという点が重要なヒントとなりうるかもしれない。実体それ自身が本質であるならば、上記の問題点に関する解答の糸口が見出されるように思われるのである。

#### (4) 今後の展望

現代形而上学の内部においてグラウンディングに関して多々論じられている中、実体についての言及はしばしば見られる。しかしながら、グラウンディングについて論じる文脈の中で、実体がそもそもどのようなものであるのかという点について論じられる事は比較的少ないように見受けられる。実体について言及される時、その実体がどのようなものであるのかという事に目を向ける事で、グラウンディングに関する更なる深い理解が可能になるように思われる。今後の展望としては、以下の二点が挙げられる。まず、グラウンディング関係のみに目を向けるのではなく、グラウンディングという形而上学的説明の中で実体がどのような内実を持ち、またどのような役割を負っ

ているのかという事を明らかにしていく事、第二に実体に目を向ける事でグラウンディングについて更なる分析を行い、アリストテレス的なメタ存在論の輪郭を更にはっきりとさせた上で、現在支配的なクワイン的なメタ存在論とアリストテレス的なメタ存在論との対立について論じていく事である。

#### (5) 参考文献

- アリストテレス（出隆（訳））.『形而上学』,アリストテレス全集第一巻,岩波書店
- Audi, P, 2012. “A clarification and defense of the notion of grounding”, in Correia, F, Schnieder, B (2012), pp. 101-121.
- Chalmers, D.J., Manley, D, Wasserman, R (Eds.) 2009. *metametaphysics :new essays on the foundations of ontology*. Oxford: Oxford University Press.
- Correia, F, Schnieder, B (Eds.) 2012. *Metaphysical Grounding: Understanding the structure of reality*. Cambridge: Cambridge University Press
- Daly, C.2012. ”Scepticism about grounding”, in Correia, F, Schnieder, B (2012), pp. 81-100.
- 井頭昌彦. 2005.「クワインの物理主義と自然化された認識論」.『科学哲学』38-2:pp. 109-122.
- 岩田圭一, 2015.『アリストテレスの存在論 〈実体〉とは何か』.早稲田大学出版部
- 加地大介,2008.「現代的実体主義の諸相——実体の独立性をめぐって」.『哲学の探究』35.pp. 37-49.
- Lowe, E.J. 1998. *The Possibility of Metaphysics: Substance, Identity, and Time*. Oxford: Oxford University Press.
- Lowe, E.J. 2009. *More Kinds of Being: A Further Study of Individuation, Identity, and the Logic of Sortal Terms* . Oxford; Wiley Blackwell
- Schaffer, J. 2009.”On What Grounds What”, in Chalmers, D.J., Manley, D, Wasserman, R (2009), pp. 347-383.

(九州大学)

#### 註

- 1 井頭(2005), p. 110.
- 2 Schaffer(2009), p. 351.
- 3 Daly(2012), p. 82.
- 4 Audi(2012), pp. 118-119.



- <sup>5</sup> 岩田(2015), p. i.
- <sup>6</sup> 加地(2008), p. 37.
- <sup>7</sup> Ibid, p. 44.
- <sup>8</sup> Lowe(1998), p. 149.
- <sup>9</sup> 加地(2008), p.44.
- <sup>10</sup> Lowe(2009), p. 16.